

# 聞名仏教

第 151 号 毎月発行  
(発行日) 2023 年 4 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号 17810 番号 7259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## 念仏の力 佐々木蓮磨

現在、東本願寺の参拝部長をしておられる禿義誠さんの祖父に当る禿顕誠師は、近代稀に見る道心堅固の聞法者でありました。この老師の感化を受けた人々は、なべて地味ではあるが、目に見えない教化力をもっておられたようです。

この寺に役僧のようにして勤め、その一生涯を老師について聞法しつづけた人に、吉村竜誠という方がおりました。

ある日のこと、吉村さんが境内の掃除をしているとき、下駄の歯替えをする旅職人がやってきて「何かご用はありませんか」と聞きましたので、吉村さんは自分の踏み減らした下駄の歯替えを頼み、そのまま草履とはきかえ、念仏もろとも掃除をつづけておられました。そのうち、下駄の修繕が出来上がったので、料金

を聞いて、下駄屋の言うがままに気持ちよくお礼を言つて金を払い、相変わらず元の如く念仏もろとも掃除をつづけておられたのであります。

ところが、今の下駄屋は一丁ほど行つてから引き返して、吉村さんにおわびをしようというには「あなたのような方から、金を貰い過ぎて申し訳がありませんから、余分をお返しします」と言つて返金したので、吉村さんは「一度差し上げたのだから、そのまま納めておいて下さい」と受け取ろうとはしなかつたのですが、下駄屋は、どうしても「受け取ってもらわないと、私は帰れません」と言つてきかないので、吉村さんは、やむを得ず「では戴いておきます。大変ご迷惑をかけました」と言つて合掌念仏して見送られたそうでありませう。何という尊い、また不

思議なやりとりではありませんか。現代の社会では、とうてい想像もつかぬことです。

この吉村さんと、下駄屋とのやりとりについて注意すべき点は、歯替料が高すぎたにもかかわらず、吉村さんは、それを咎めもせず、値切りもせず、相手の言うがままにお礼をいうて料金を払われたことです。これは吉村さんが、相手を信じておられたからだと思います。ところが相手の下駄屋は一丁ほど行つてから引き返してきて、吉村さんにおわびし、余分の金を持つて帰ることができなかつたものと思ひます。

もし、そのとき吉村さんが相手を咎めたり、値切つたりしておられたらどうでしょう。おそらく相手は反省することなく、いろいろと理屈をつけてカケ値の分を返すことはなかつたらう

と思ひます。たとい返金しても、後味の悪い返し方をしたものと思ひます。ところが、吉村さんが一言の咎めも不服も言わず、相手の言うがままに金を払い、元の如く念仏もろとも、黙々として労作にいそしんでおられた姿こそが、相手を反省させたものではないでしょうか。

これは人間吉村さんのお仕事ではありません。全く仏仕事であつたと思ひます。その返金にきた下駄屋の気持、それに対しての吉村さんの態度、吉村さんの態度に対しての下駄屋の所為、全ては人間の世界において見ることのできない拝み合の姿ではありませんか。この美しい姿をほかにして、どこに浄土があるのでしょうか。

真宗の念佛は、単に口にナムアマミダブツと称えるのみではありません。如来の本願に従う行為です。如来の本願に従うとき、如来は私生活の上に生きて働いてくださるのではないでしようか。

# 現代真宗問答 16

法事の後の雑談のなかで、  
「漁に出て、海がシケて大荒れになっ

得ないですね」

B 「ときどき、自力の念仏はダメで他力の念仏でなくてはならない、ということ

B 「そうすると他力の念仏をいただく前に自力の念仏があるんですね」

を聞きますが」

A 「ええそれが自然です。

A 「それは間違いではありませんが、実際に仏法を求めるとき、この点については注意が必要です。

A 「ええそれが自然です。ただし、念仏に自力・他力があるのではなく、念仏を称える私たちの受け止め方に自力・他力があるのです。

まず仏法を求める最初から他力の念仏を行う人はほとんどいないでしょう」

念仏はみな他力、すなわち本願力の表れであるというのが真宗の理解だと思えます」

B 「ということは初めはみな自力の念仏ということですか」

B 「自力の念仏とは」

A 「念仏とは南無阿彌陀仏と称えることですが、最初は皆と言っていいほど自力の念仏ではないでしょうか」

A 「一般には自分中心的な願いを叶えようとして称える念仏と違っていいでしょう。いわば自分に都合がよくなることを願って称える念仏です。これにもいろいろな姿、乃至はレベルがあります」

B 「そうですね」

B 「といいますと」

A 「初めは自力の念仏ですが、それが他力の念仏に転じるのです。転じるにしても自力の念仏があつてこそ

A 「たとえば、私が昔、甕島で住職代務者をしていました時、門徒さんで漁師の方がいました。その人がご

B 「これも自力の心なのですね。いわば自分の都合の悪いことは除かれて都合のよいようにしたい、という心情ですね」

B 「念仏の意味は分からなくても、称えることによつて、ごく一時的でも楽になるんですね」

A 「ええそうなんです。ただこういう念仏を初めから排除するのではなく、こういうように困った時に念仏を申す、それだけでなく、心がモヤモヤする時、うつ

A 「ええそうです。こういう経験が入り口になり得るのです。そしてこの自力の念仏は幅が広く、専門の佛道修行においても自力の念仏が称えられているのです」

悲しい時などを縁として、南無阿彌陀仏を称える、そういうさまざまな縁を通してともかくもお念仏を称えることから真宗は始まるのだと思います」

B 「病気が治りたい、商売繁盛したい、タタリが来ないように、あるいは受験が通りますように」というような自分の都合のいいようなことを願って称える念仏だけではなく、専門の佛道修行においても自力の念仏があるのですね、それはどんな念仏ですか」

B 「いわば楽になりたいために称える念仏を排除するのではなく、困ったからお念仏、楽になりたい為のお念仏、お願いごとのお念仏から入っていくのですね」

A 「いわば自力の修行としての念仏です。さとりを開きたいと願って称える念仏です。真実に遇いたい、悟りを開きたい、信心を得たい、浄土に生まれたいと思つて称える念仏です。これも自力の念仏であると真宗では教えられています」

A 「同じですね。なおアメリカ映画などで、どうしようもなく困ったときにアメリカ人がよく「オーマイゴッド」と叫びますね、あの言葉とやや似ています。「我が神よ、お助け下さい」という心でしょう」

A 「排除されないとどこか、

B 「たたとえば、私が昔、甕島で住職代務者をしていました時、門徒さんで漁師の方がいました。その人がご

A 「たたとえば、私が昔、甕島で住職代務者をしていました時、門徒さんで漁師の方がいました。その人がご

B 「たたとえば、私が昔、甕島で住職代務者をしていました時、門徒さんで漁師の方がいました。その人がご

A 「たたとえば、私が昔、甕島で住職代務者をしていました時、門徒さんで漁師の方がいました。その人がご

B 「たたとえば、私が昔、甕島で住職代務者をしていました時、門徒さんで漁師の方がいました。その人がご

A 「たたとえば、私が昔、甕島で住職代務者をしていました時、門徒さんで漁師の方がいました。その人がご

念仏もない中で他力の念仏になるというのは先ずあり

念仏もない中で他力の念仏になるというのは先ずあり

念仏もない中で他力の念仏になるというのは先ずあり

念仏もない中で他力の念仏になるというのは先ずあり

念仏もない中で他力の念仏になるというのは先ずあり

こうした念仏も当然ありです。現代でも多くの仏道修行者がさとりを開くため、あるいは浄土に往生するために念仏を称えています。

ことに中国の仏道修行者に多いです。それは心を静めたり浄土に向かうために称える善根としての念仏です」

B 「真宗の人でも信心をなんとかして得たいと思っ称えることもありませぬ」

A 「ええそうです。オーマイゴツド的な念仏からでもいいのです。念仏を称える身にまずなるということですね」

B 「初めは〈助けて下さい阿弥陀様〉的な念仏でいいのですね。それを縁としてお念仏のお心を聞くのですね。お念仏のお心とは」

A 「ええそれも自力ですが、当然ありの念仏です。ただ真宗の場合は何とか信心を得たいとお念仏に励むのはいいとしても、お念仏の正確ないわれを詳しく何度も聞くことが並行していなければなりません。念仏のいわれをよくよく聞きながら念仏に励むことは大変大事なことだと私は思っています」

B 「とにかくどういう縁であつても念仏を称えることが大事で、そこから入るのであり、一度念仏を称える身になると、お念仏のお心をよくよく聴聞することが並行的に行われなければならぬ」

B 「人間の間から〈助けて下さい阿弥陀様〉ではなくて〈タスケルでマカセヨ〉の大慈大悲の仰せの南無阿弥陀様なのですね。どちらでも〈助ける〉という言葉ですね」

A 「ええ、〈助けて下さい〉も〈助けてやる〉もどちらも〈救い〉に関わってきますが、私たちの〈助けて下さい〉と願っている救いは、殆どは自己中心的願望を叶えてもらおうという〈お助け〉であつて、それは自我中心であつて、いつまでも救いが成就しません。商売繁盛を願つても、健康を願つても、長生きを願つても、受験の合格を願つても、それらがたとえ実現しても、みな最後はなくなったり減ったり、変化していきますし、最後はそう願う我が身が壊れていく存在ですから、そういう救いは一時的であり、たとえ願いが実現しても無くなりはいませんかという不安がつきまといます。またしばらくは満足してもすぐに当たり前になりやがて不足が起こります」

B 「では阿弥陀仏が〈助ける〉というお助けの内容は何ですか」

A 「それは阿弥陀仏と私が離れない身になることです。量りないのちの阿弥陀仏に摂め取られ抱き取られるという救いです。そうなる」とこの世で何が起ころうとも大悲の阿弥陀仏は共にまします。私を摂め取りたまひ、いつも変わらないあたかい土台の上に置いていてくださるのです。阿弥陀仏のいのちの外に私は無いという救いです。これが阿弥陀仏の〈お助け〉であり、そういう救いを与えてくださる喚び声が〈汝をヒキウケルでマカセヨ〉、タスケルでマカセヨ〉の南無阿弥陀仏の喚び声なのです」

B 「そうすると私たちが自分勝手な願望を叶えてもらいたいというようなお助けを願つての〈阿弥陀様お助け下さい〉と願つて称えるお念仏とは根本的に違ひませぬ」

A 「ええ、お念仏の受け取り方が全く違っているのです。南無阿弥陀仏の念仏そのものは阿弥陀御自身の<sup>はたら</sup>お用きです。それを自分がお用に<sup>はたら</sup>、御利益や災難よけの念仏に受け取ってしまうのです」

B 「分かりました。ともかくどういう手をおもちしてもお念仏を申すところから浄土真宗が始まり、そのお念仏を正しく受け取るべくお念仏のお心を聞き抜いていくことが大事なのですね」

A 「ええそうです。お念仏そのものは阿弥陀仏ご自身の<sup>はたら</sup>お用きですからだんだんその<sup>はたら</sup>用きが私たちに浸透していつて〈ああ、この阿弥陀仏に助けられるばかりであつた〉と気がつくのです。そしてそれがさらに続いていくとお念仏が生活全体に浸透してお念仏によって生活が動かされるほどにまですなる尊いお方もいるのです。私がお出遇いした松並松五郎というお方などは〈私は阿弥陀様の操り人形です〉とまでおっしゃっていました」

B 「お念仏のお徳は計り知れないですね」 (了)

B 「人間の間から〈助けて下さい阿弥陀様〉ではなくて〈タスケルでマカセヨ〉の仏の大悲の仰せを聞かせていただく念仏です」

B 「人間の側から〈助けて

# 清沢満之の言葉

## 《清沢満之師の言葉》

「パン無くば死ぬ」、これが先生の生活問題解決の秘訣であった。

一たび話が生活問題に触れるや、先生の言々句々は、白刃のひらめく如く、聴く者の上に威力を振るつたと言われている。

(佐々木蓮磨編「清沢満之の言葉」より)

この清沢満之先生(一八六三〜一九〇三。真宗大谷派の高僧)の言葉はよく知られておりますが、ちよつと読むとあまりにも極端な言葉であるように思います。しかしここまですごい生活問題の根本的な解決はないと思えます。

情勢や環境の変動で実際お金がなくなる時があり得ます。だれでも「私はどうなるうともお金がなくなることはない、食べ物がない」と断言で

きる人はいません。縁によつては窮乏しかねません。

清沢先生の座談で、こういう状態になったらどうしたらいいですかとある学生が先生に質問したとき、先生は「他者のところに行つて食を乞いなさい」といわれました。現代なら政府の生活保護を受けなさい、といわれるでしょう。そうするとその学生が「人が食を恵んでくれなかったらどうしたらいいのですか」とまた問いました。そうすると「パン無くば死ぬ」と一言いわれました。

食えなくなれば死ぬばい、といわれる。つまり、死の縁が来れば死ぬという自然の事実に随順する、これがいつでも開かれている道でありそこに苦は無いとのことでしよう。ギリシヤの哲人エピクテトスが「死の扉はいつでも開かれている」といいましたが同じ真理です。どこまでも死にた

くないという思い(我愛)が自分を苦しめているといえましょう。

この場合「死は不幸であるというマイナスの価値観」の転換が基本的になければ難しいと思えます。

しかし「パン無くば死ぬ」という生き方ができるのはよほどの達人であつて、煩惱具足の凡夫にはとても無理なように思います。

ただ、死にたくないの思いで生きている凡夫にも、死ぬ縁が来れば死ぬばいという道が、死にたくないという煩惱だらけの凡夫にも与えられる、それが南無阿弥陀仏の法ではないでしょうか。それは「死ぬのではない浄土に生まれるのである」という価値観に転換してくださるのが南無阿弥陀仏の法だからです。

## 《遠方法話予定》

五月七日(日)法話・座談。午後三時より五時頃まで。

名古屋市中川区高畑四一五一。盛福寺聞法会館にて。

世話人・坪井昭夫氏(電・〇五二・三五二。六九四三)

## 《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(土)。午後二時始

法話 題「煩惱の構造」  
講師 大谷大学名誉教授 小谷信千代先生  
小谷先生はインド仏教学の権威者です。

## 《幡谷明講話集全七巻・予約受付》

先年逝去された大谷大学名誉教授で真宗学の泰斗・幡谷明博士の講話集が全七巻で出版されることになりました。浄土文類聚鈔から先生の専門領域であつた浄土論註などについての一般者向けの講話集です。

全七巻セットで二四六四〇円です。かなりの寄付金が出版資金に投入されていますので、特別割引価格になっていきます。もし購入ご希望でしたら法蔵館(075-343-0458)に申し込んで下さい。専用の振替用紙が送られてきます。小生も原稿整理に関わっています。

## 【住職雑感】

やつとコロ ナウイルスの束縛から解放されようとしている。しかし、今後この手の感染症が流行する時が来ることは間違いないと思われる。マスクを着用して読経するのは、声がこもって不明瞭になり、またマスクを吸い込むことにもなつて不快である。それゆえマスク無しで読経が許されるようになってほつとしていく。別の話だが毎日読経をするのはノドのリハビリにもなり誤嚥性肺炎を防ぐ効果があると思われ、人にも毎日読経することを勧めている。